

みんなで
おはよう
アラバマ放送史

題字 中川 順

ジョクジャカルタ放送局開設秘話

—トラブルとクーデターに脅えた日々—

柏倉 宏聿 (HBC)

1965年7月19日午後8時40分、JAL711便はこれが首都の国際空港か?と疑いたくなる暗い空港に着陸した。一時間前に飛び立ったシンガポール空港の眩しさとは対照的なジャカルタ空港であった。ホテルで床に就いたのは真夜中過ぎだった。

日本がインドネシアへの戦時賠償の一つとして中部ジャワの古都ジョクジャカルタに放送局を作り、あわせてジャカルタから約500kmのマイクロ回線と、バンドンとスマランに中継局を建設するプロジェクトだった。

すでに前年にはジャカルタに本局が完成、NHKから出向した職員の指導で、放送を始めていた。ジョクジャの工事全体の監督と落成後の技術指導ということで私が派遣されたのだった。

局舎、鉄塔、受電工事はすべてインドネシアの業者が7月末までに完成させておく。日本勢は機器の復元、調整を行い、独立記念日の8月17日には間違いない電波を発射させること、というのが出国前の指示であった。

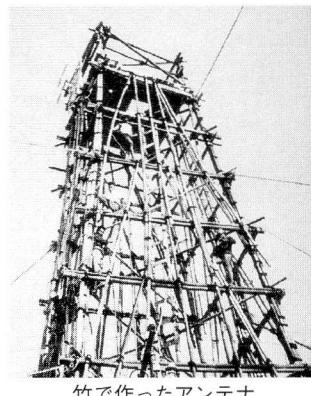
楽勝モードで出掛けたが、翌日、情報相に続きTV-RRI(Republik Indonesia)本部に挨拶に行つたころから一抹の不安を感じ始めた。前年に納めた新品のカメラや調整室の系統図を見せて欲しいといつたらそんな図面は見たことがないという。さらに挨拶の後すぐジョクジャカルタに出発するつもりだつたが、「旅行許可証」を持たない外国人の移動はダメ、と言われ不安はつのつた。

バンブータワー

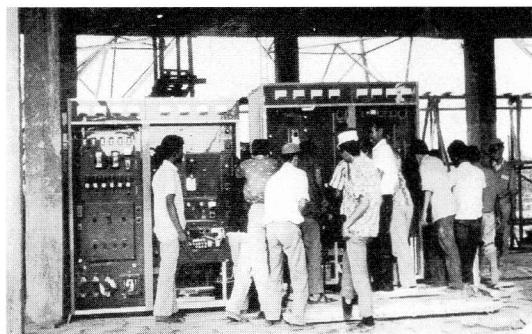
2日間待つて、ようやく許可証を入手。遅れを取り戻すべくジープで夜通し走り続けてジョクジャカルタに着いたのは7月23日の昼前だった。到着早々、眠気を吹き飛ばされた。完成しているはずの130mの送信タワーがまだ半分ほどしか出来ていない。8月17日には電波を出すなんて絶望的だ。何とか、形だけでも電波を出さな

いと契約違反になると主契約者の商社が懇願する。

建設途中の鉄塔側面にアンテナをつけて電波を出すことも考えたが危険至極。「代わりのタワーがあればな!」と呟いたら、「竹で作ろう」と現地監督。「エーッ? 竹でー?」と思ったが他に妙案はない。直径30センチ、長さ10mほどの太い竹を4本束ねて一本の柱とし、これを4隅に建て、驚いたことにたった5日間で、20m程の結構ガツチリしたタワーを作り上げてしまった。



竹で作ったアンテナ



壁のない送信機室、裏に鉄塔の脚が見える

他也推して知るべし。送信機は柱と天井だけで壁がない部屋に据え付けることになった。壁の代わりに竹で編んだアンペラで囲うといふ。砂ぼこりは、屋外と変わらない。「故障の原因になる」と反対したが、「期日通りに電波を出

さないと日本人は全員拘束」と言われたという商社の論理に押し切られてしまった。このツケは大きかった。

送信機は札幌・手稲山のHBCと同じ10kWだ。2ダイポールアンテナ1面に定格パワーを加えたらいつまでも下げる何とか見られる画にするのに完全に1日かかった。普通はパワーを上げ何とか見られる画にするのにつけんに焼けてしまう。パワーを

故障 故障 故障

最初の故障はカメラだった。高圧部を中心にはこりがコビリ着いていた。取扱説明書と首っ引きで苦心惨憺の末、曲がりなりにも電波を出せるようにしたというのだが、「故障の原因になる」と反対したが、「期日通りに電波を出

るノ大統領の画はどう来るか

政情不安その他いろいろな理由や思惑があつたようだが…。約束を死守した日本人はまさにドン・キホーテとサンチョ・パンサ。この頃になつて、毎日熱心に見学に来る近所の高校生と思つていた若者たちが新局の技術者だと知らされた。ジャカルタで一年間送信機を担当していた1名とスタジオ機器を担当した1名、東芝の工場で1ヶ月実習したという2名が経験者。あとは高校出たての新人。開局後、運用しながら訓練していく

といふ。

え付けたことの報いは東芝の技術者が全員帰国し、私が一人ぼっちになるのを待つっていたかのようになんとか直した。

ホツとしたのも束の間、真空管のクラックが起こった。放熱フィンの間に綿くず状のゴミが引つか

2日かかった。結果、真空管を交換したら直つた。結局、メチャになってしまった。青くなつたが真空管のソケット一本ずつをガソリンで洗い、抵抗を数本と真空管を交換したたら直つた。結局、2日かかった。

かり、それに細かい砂が付着し、ガラスにヒビが入つていた。

街から約40kmのところにメラピ山という標高2910mの活火山があり、火山灰の多いところだと聞かされたが後の祭り。

続いて音声エキサイターの異常発振。画面に音の成分が入つていいのではないかと目を凝らしてみていたら、見る間に画面はメチャになつてしまつた。青くなつたが真空管のソケット一本ずつをガソリンで洗い、抵抗を数本と真空管を交換したたら直つた。結局、2日かかった。



送信機担当者は全員高校を卒業したばかり

次は乱像。画面の下が横に流れ因だつた。横着して変調盤の裏のコネクタを探りで外そうとして高压に触つてしまつた。棒状のもので強く叩かれたようだつた。恥ずかしさと面白なさで今まで誰にも話さなかつたが、大事故になるところだつた。左手の甲と手首に開いた3つの深い傷には軟膏を塗りこんで知らぬ顔をしていたが、帰国後、何年も冬になると疼いた。心も疼いた。横着は「命取り」を実感した。

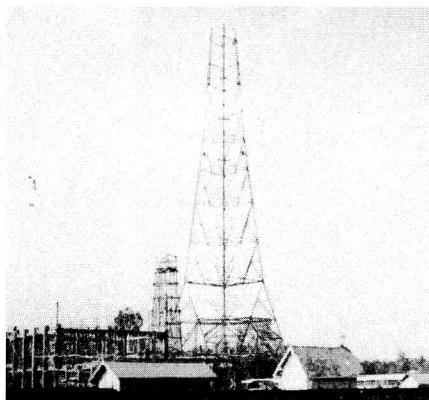
それもこれもほこりと湿気が原因とにらんで、送信機室の壁が完成したところだつたので、担当全員に床を雑巾がけさせようとしたところ、「掃除をするのは他人の役目だ、どうして自分たちが?」

9・30事件

1965・9・30。インドネシア陸軍左派の一隊が軍要人を拉致、殺害して革命評議会を設立するが、翌夜、スハルト少将の軍隊がこれを一掃、スカルノ政権下で権力を握つていた共産主義勢力を排除する。このクーデターの背後に中国があるとの噂が流れ全土で中国系の人々の虐殺がはじまつた。川はその死体で赤く染まつたという。この結果、66年、スカルノはスハルトに大統領権限を委譲することになる。

今まで2ヶ月はかかつた。
今の大統領の父親スカルノ大統領が失脚したのはこの年である。そのきっかけになつた9・30事件が起きたのは、丁度、アンテナの完成も目前、そろそろ本放送の準備にかかるうといふところだつた。

この事件の引き金となつたクーデターのため、アンペックスの技術者は来ないことになり、VTRの復元、立ち上げのためにTV-RIB本部から担当者が来た。どうしても動かないで見てくれという。電源電圧を測つたら70%しかない。



未完の鉄塔と仮のバンブータワー

マイクロが切れ、故障はどこ切れた」と怒鳴つていると、「燃料が連絡が来ることもしばしばだつた。連絡が来るうちは良いのだが、音沙汰もないまま丸一日待たされることもあつた。

これに1人で取り組んでいたのだから普通ならノイローゼになつても不思議はないところだが、イライラしたことは勿論、切迫感を感じたことすら無かつたのは今もつて不思議である。クーデター騒

だ? と怒鳴つていると、「燃料が切れたら」というノンビリした連絡が来ることもしばしばだつた。連絡が来るうちは良いのだが、音沙汰もないまま丸一日待たされることもあつた。

マイクロが切れ、故障はどこに置いてあつた2つのドラムを絆がついていた。巨大リアクタンスによる電圧降下なんて初体験だつた。

マイクロが切れ、故障はどこに置いてあつた2つのドラムを絆がついていた。巨大リアクタンスによる電圧降下なんて初体験だつた。

そこでテレビどころではないという由して繋がつていた。巨大リアクトンスによる電圧降下なんて初体験だつた。

そこでテレビどころではないという由して繋がつていた。巨大リアクトンスによる電圧降下なんて初体験だつた。

ジープでウインチ

反乱軍の占拠

話は前後するが、鉄塔建設のペースがあまりに遅く、仮放送を始め1ヶ月経つてもようやく半分の高さになつたばかり。この分ではいつになつたら帰国できるのか、とアンテナ担当の住友電工の2人、イライラし始めた。

「ウインチが無いのならジープで引っ張つたら?」と言つたのが災いの元、自分がウインチ役を務めるハメに陥つてしまつた。最上部に取り付けた滑車を介して部材を引っ張り上げるのは人力方式と同じだが、手で引っ張る代わりにロープの端を鉄塔の真下に固定した滑車に通しさらに水平方向に伸ばして、これをジープで引っ張ればと考えた。住電の山田さんが塔頂、富永さんが地上で全体を指揮し、私はジープで引っ張る役。笛の合図で前進・後退して、現地業者が一ヶ月かかると言つていた仕事を6日で仕上げ、「ジパニバゲースカリ(日本人、最高)」と

9・30 事件当日も、翌10月1日もジョクジヤでは何も変わつたことはなく、夜、シンガボールのBCを聞いていて始めて何か起きたらしいことを知つた程度だつた。でも、ジョクジヤなんて田舎は大丈夫だらうと寝ていた3日の真夜中、近くでダ・ダ・ダ・ダと機関銃らしい音が響き、何人かが走り回る音が聞えた。「こりや本物だ!」と飛び起きた。

実は、その日ギソクリ腰氣味になり、サロンバスを貼つて早めに寝ていた。銃を持つた連中に踏み込まれたらとても逃げ切れない。「ベッドの下に隠れようか」「いや、すぐに見つかって撃たれる、かえつてマズイ」。まんじりともしないで朝を迎えた。

朝、まだ暗いうちに局長のデワボラタ氏があたふたと来て、「大変だ。この家から一歩も出たらダメ。トランジスタラジオを貸して」

と言つて私の唯一の耳を持つて行つてしまつた。身辺警護に大学生3人を宿舎に常駐させてくれた。

反乱軍がテレビ局を占拠に来たのはその3日後だつた。本アンテナが未完成だったので防塵対策に送信機や放送機器にはカバーを被せており、フィーダーも切り離してあつたので、当分放送は出来ないわかつたのだろう、3日ほどで引き上げた。

ラジオ局では抵抗した局長が射殺され、何人かが拉致された。こういうときには放送局は最初に狙われるということが身に沁みた。街中で反乱軍による略奪、殺人が頻発、反乱軍に対する反感が広がつた。そのうちに、反乱は中国共产党が支援しているという噂が流れ、今度は中国系住民に対する焼き討ちや殺戮がはじまつた。

「カシさんは中国人と同じ顔、用心して」と言われ、専用車の前

にインドネシア国旗と日の丸を並べて張り、白いハンカチにマジックで丸をかいた「日の丸」を胸ポケットに持ち歩くようにした。

状況がエスカレートし「ジャカルタに集まれ」との大天使館からの連絡で、10月下旬、ジャカルタに

ジヤを後にして。機器もようやく落ち着いて、今度こそ安定した放送を始められる、年末年始は家族を呼んで、バリ島で過ごそうというアマイ計画は吹っ飛んだ。

インドネシア情勢が落ちていたのは数年後だつた。結局、私の再度の赴任は消えてしまつた。

あの人、この人

3年前の夏、ジョクジヤカルタに出来た国立マルチメディア研究所で「放送技術の基礎」の講座を持たないかという話があつた。喜んで引き受けた。

街に入つて真っ先に探したのは私自身ジープで引っ張つて建てた鉄塔だつた。35年前は田んぼの中にあつたテレビ局も、今では街のまん中にあつた。鉄塔はUHFのアンテナを増設して堂々と建つて

一次待避したが、空港で「日の丸」を翻した迎えの車を見たときは思わず涙が出てきたのを覚えている。機関銃の音や戦車の空冷ディーゼルエンジンのナマの音は不気味である。いつ狙われるかと思うと心臓が縮み上がる思いがする。

11月初旬、治安が落ち着いたとの報告で再びジョクジヤに戻つたが、結局、この安定は長くは続かなかつた。

12月上旬になると周辺でもムゴタらしい事件が連續した。私は日本に一旦引き揚げ、政情が安定した後に再度赴任と決まり、ジョク



鎮圧に來た政府軍の戦車が木の蔭に見える



街中にそびえるアンテナ

いた。局に顔を出したらなんと、往時の生徒が1人残つていて、バンブー・タワー や クーデター時の話に花が咲いた。翌年、定年と聞いて改めて年月を感じた。

V R I 本部の技術局長を務め、関連会社社長。ジョコ君は T V R I を離れ、国のデジタル放送技術研究会の座長という要職を務めていた。教え子の出世を喜ぶ老教師の心境だった。

たこともある。
先生の奥さんの妹さんがまた素晴らしい美人。あと半年帰るのが遅かつたら…。
美術館や植物園、動物園にも行つたし、軍の病院でムシ歯を1本抜いて貰つたり、変わつた経験もした。
引き揚げるとき、ジャカルタの

ヨグジヤ局長のデワボラタ氏、送信機修理の手伝いをしてくれたジヨコ君、シンクジエネレーータ修理を手伝ってくれたスパルト君、ダ

ルソー君たちが待つていた。みんなで歓迎パーティを開いてくれたバンブーダワーとホコリ対策はみんなの印象に強烈に残っていた。当時、私はようやくここに馴染んでいた。

思い出すままに雑然と書き連ねたが、マイクロ回線がどうやっても通らず、よくよく調べてみたら地図に無い山に遮断されていたことがわかり、急遽、途中に中継点を一ヵ所増やしたことも忘れられない。クーデター直後、外国との電話回線は切れ、空港閉鎖で国際線は全てとまつたときは心細い思いをしたが、楽しい思い出も多い

空港で「帰るな、コワレタから戻れ」と、連れ戻しに来はしないかと気になっていた。

J A Lが国境線を越えたと聞かされたとき、本当に安心したのをいまだに覚えているところを見るに、表向きは強がつてはいたもの、本心は逃げ出したかったのかとも知れない。おのれの弱さを感じた次第である。

ア、「ソーカ、ソーカ」と独り言を言つていたと誰かがマネをしたり大笑のパティだつた。
それにしても、みんな偉くなつていた。デワボラタ氏はドイツのハイデルバーレフ大学を出て「エリ」

ハイテルヘルクナ学を出たエリトロト。案の定、日本で言う事務次官まで務め上げて、リタイア。

「デワ」とは高貴な男性につける敬称のこと。女性には「デウイ」。テレビなどで見かけるお方は

後年、世界遺産になつたボロブドール遺跡にも何回か行つたし、やはり世界遺産のプランバナン遺跡での月夜のラーマ・ヤーナの幻想的な踊りも忘れられない。

後年、世界遺産になつたボロブドール遺跡にも何回か行つたし、やはり世界遺産のプランバナン遺跡での月夜のラーマ・ヤーナの幻想的な踊りも忘れられない。



ボロブドール遺跡にて(筆者)